

平成 27 年 12 月 16 日

秩父市議会議長 笠原 宏 平 様

まちづくり委員長 富田 俊 和

まちづくり委員会行政視察報告書

- 1 期 日 平成 27 年 9 月 29 日 (火) ～10 月 1 日 (木)
- 2 視察先 鹿児島県南九州市、やねだん (鹿児島県鹿屋市柳谷集落)、福岡県うきは市
- 3 参加者 委員長 富田 俊和 副委員長 山中 進
委員 江田 治雄 委員 竹内 勝利
委員 大久保 進 委員 松澤 一雄
委員 荒船 功

4 視察目的

鹿児島県南九州市 「文化遺産を活用した観光振興について」

○ 市の概要

南九州市は、平成 19 年 12 月に顛娃町、知覧町、川辺町が合併して誕生した。薩摩半島中央部に位置しており、面積 357.85 平方キロメートル、人口約 3 万 7,000 人、高齢化率は約 40% である。主な産業は農業で、お茶とサツマイモの生産量は自治体単位で全国一を誇る。市の総合計画では、「安心・安全な食の提供と未来を支える農業のまちづくり」を掲げ、南の「食糧供給基地」を目指している。川辺地域では、伝統工芸品の川辺仏壇を製造、全国に販売されており、知覧地域では、歴史と景観を活かしたまちづくりを進めている。九州新幹線が整備されたが、鹿児島からの交通アクセスが課題となっている。

○ 事業の概要

南九州市の観光は、昭和 40 年代前半に、知覧の武家屋敷庭園群が文献などで紹介されたことが契機となった。昭和 48 年、地元のバス会社が鹿児島市からの定期観光コースに武家屋敷を取り込み、「薩摩の小京都、知覧」と言われるようになった。昭和 50 年の武家屋敷の観光客は 2 万 5,000 人であったが、平成 13 年には 37 万 5,000 人まで増加した。同じく昭和 50 年には知覧特攻遺品館が開館している。武家屋敷を中心とする知覧地区の市街地は、昭和 55 年から道路や

公園などのインフラ整備を行い、歴史と景観を生かした潤いのある街並み整備として、刈り込



まれたイヌマキを街路樹として植栽、鯉の泳ぐ水路の整備、和風街路灯の設置などによるまちづくりが進められてきた。昭和 62 年には知覧特攻平和会館が新築され、より多くの資料展示や語り部による講和の実施など、受け入れ態勢を充実させている。武家屋敷と平和会館の入場者が 100 万人を突破したのは平成 2 年であり、以来 20 年間、毎年同程度の観光客が訪れている。

やねだん 「地域再生～行政に頼らない「むら」おこし～について」

○ やねだんの概要

鹿児島県大隅半島のほぼ中央に位置する鹿屋市串良町柳谷地区。地元の人は「やねだん」と呼ぶ、120 世帯およそ 300 人が共存する、高齢化が進む古典的な中山間地域の集落である。この集落が、アイデアあふれるリーダー・豊重哲郎自治公民館館長のもと、子どもたちから高齢者まで強い絆で結ばれ、行政に頼らない「むら」おこしを実践しており、地方創生の“good practice”として全国的に注目されている。

○ やねだんの理念

行政に頼らない「むら」おこしを実践し、住んでよかった、住みたいと思える地域づくりを目指している。

補助金漬けで国や市の行政に頼りきりでは集落の力を削ぐだけで集落も人も育たない。補助金に代わるもの。それは汗、すなわち活動への参加である。幼児から高齢者まで出番を引き出し、地域活動に自主参加してもらうための土台づくりから始めた。集落一人ひとりが「レギュラー」であり、やねだんに「補欠」はいない。地域活動では絶対に犠牲者を出してはいけないし、できる人たちだけでやっては長続きせず、感動もない。

○ 事業の概要

① 自主財源を稼ぐ

土着菌堆肥の製造・販売から、サツマイモ栽培とその販売及び収穫したサツマイモを使用したオリジナル焼酎の開発・販売、トウガラシ栽培からのコチュジャン開発・販売といった、集団営農における第 6 次産業を推進することにより集落の独自財源を築いている。今後はエゴマ栽培（及び販売）に取り組む予定とのこと。

② 福祉・環境整備

稼いだ自主財源は、まず福祉・環境整備に充てている。高齢者への 1 万円のボーナス支給、独居福祉対策老人緊急警報機設置などを実施している。

③ 教育・文化の向上

集落を維持していくためには、教育と文化が大切なテーマになる。「高校生クラブ」の結成や「青少年の学ぶ寺子屋」の開設、「夢と感動を与えるめったに聴けないコンサート」の開催、老朽化した空き家を修繕して芸術家の移住を受け入れるなどの事業を実施している。

④ 社会貢献

東日本大震災において車両不足に悩む被災地のために車を購入し、支援物資を積み込んで仙台のNPO法人へ届けるなどの活動を実践している。

⑤ 活動記録の伝達

やねだん活動の歴史を記録し、地域再生の後継者育成のために書籍やDVDを作成した。また、視察の受け入れや豊重氏自身による講演活動も行っている。なお、地域再生リーダー養成を目的として、平成19年から「故郷（ふるさと）創生塾」を開催しており、多くの会社経営者や自治体の首長及び職員が参加している。



福岡県うきは市 「道の駅うきはを拠点としたヒト・モノ流動の活性化について」

○ 市の概要

うきは市は、平成17年3月20日に、吉井町と浮羽町の合併により誕生した。福岡県の南東部に位置し、温暖な気候に恵まれ、耳納連山と筑後川の間に肥沃な農業地帯が広がっている。豊かな自然の象徴として4つの全国百選があり、いちご、桃、ぶどう、梨、柿などのフルーツ生産をはじめ、米やお茶、ハウス施設を使ったトマトや花卉の生産が盛んである。また、企業誘致を進め、船舶部品や自動車部品工場など、十数社が操業している。人口は約3万1,000人と少ないが、「笑顔が美しい、いきいきとしたひとを育むまちづくり」に取り組んでいる。

○ 事業の概要

うきは市で取り組んでいる「グリーン・ツーリズム事業」の核となる施設として位置付けられており、都市と農村を結ぶ交流拠点として整備されている。市内で収穫された四季折々のフルーツなどの農産物のほか、交流都市の特産品なども販売している。

「道の駅うきは」は、平成27年1月30日に、『国土交通省「重点」道の駅』に認定された。『「重点」道の駅』とは、地域活性化の拠点を形成する道の駅の取り組みを応援する国交省の制度であり、全国35か所が認定され、道の駅整備に要する費用等について、国からの強力な支援が受けられる。

今後は、高齢者や女性の活躍の場として、さらには地方創生拠点として地域福祉や産業振興、地域文化・観光情報の発進の場として、関係機関との連携により整備等を進める計画であり、来年度は国の直轄事業として駐車場の拡張整備を行う予定である。

【まちづくり委員会行政視察報告書 富田 俊和】

私達まちづくり委員会は、今後の秩父市政進展の推進に活かすことを目的に他市の行政視察を行ったため、以下のとおり報告する。

今回の視察は、秩父市とある程度環境が似ている市を訪問した。南九州市知覧地域においては、文化遺産を活用した観光振興である。南九州市の観光は、昭和40年に知覧の武家屋敷庭園群が文献などに紹介されたことがきっかけとなっている。昭和50年の武家屋敷の観光客は2万5,000人であったが、平成13年には37万5,000人まで増加した。同じく昭和50年には知覧特攻遺品館が開館している。知覧町の市街地は、昭和55年から道路や公園などのインフラ整備を行い、和風で落ち着いたたたずまいのまちづくりが進められた。昭和62年には知覧特攻平和会館が新設され、資料展示や語り部による受け入れ態勢が充実した。武家屋敷と平和会館の入場者が100万人を突破したのは平成2年で、以来20年間ほぼ同程度の観光客が訪れている。戦後70年の話題もあり、高校生の教育旅行も増加していると聞いた。何はともあれ、この2つのスポットがあるからこそ、鹿児島市からの交通の不便さはあっても魅力があるのではないかと感じた。2日目、私たちは鹿屋市(やねだん)を訪れた。既にテレビ放映等で概要は存じていたが、やねだんの自治公民館長である豊重哲郎氏に会った瞬間、一步引いてしまった。真剣な眼差し、言動、感動の人生を歩むその人であったからだ。嘘のない人物であるとすぐにわかった。財源をつくった、300人、集落総出である。本人は説明をしている中で、自分はへび年で負けず嫌いだとも言った。いい顔をしていた。

【知覧の武家屋敷と特攻平和会館の視察 山中 進】

○知覧の武家屋敷

南九州市の薩摩藩邸は町並みが、まさに、薩摩の小京都とも呼ばれており、敷地内には名勝地として7つの庭園が指定されている。260年前から累々と変わらぬ姿を残しており、武家屋敷がつらなる通りから一步足を踏み入れると、箱庭のような庭園は、当時の薩摩武士の熱い息使いが感じられ、タイムスリップした気分にもなる優雅で力強さが印象的であった。



当秩父市でも、織物買い継ぎ通りや大正ロマンをほうふつさせる建築物が残っている。観光の目玉としても訪れる人達に知ってもらい、見てもらうそのためのガイドの養成やパンフレットなどの充実が求められる視察であった。

○知覧特攻平和会館の視察

知覧の特攻平和会館はまさに、あの、70年前の戦争による国のためと命をささげた若者の叫びが、一通の手紙、短歌や俳句に託し親や恋人を思う心の叫びが聞こえてくる胸を打つ内容であった。安保法が成立した今、平和を願う多くの人たちとともに、特攻平和会館を大事にしていかなければならないと痛切に感じられた施設であった。

【視察を終えて 江田 治雄】

鹿児島県大隅半島のほぼ中央に位置する鹿屋市串良町柳谷地区。通称「やねだん」に伺った。行政に頼らない「むらおこし」で成功している最近話題を呼んでいる地区である。中山間地区と聞いており、自分の勝手な想像は山あり谷ありのまさに秩父と同じようなイメージであったが、何うと広大な肥沃の土地を持つ平地であり、120世帯およそ300人が暮らす高齢化の進む地区であった。約20年前に自治公民館長として選ばれた豊重哲郎さんが地域のリーダーで様々な事業展開をしている。耕作放棄地を地域の総力をあげて、サツマイモ・唐辛子の栽培・土着菌肥料・オリジナル薩摩焼酎等を手掛け販売し収益を上げ、更に農家にボーナス支給まで実現している。まさに地方創生の鏡であり、地域力の必要性の先進地である。古民家を改築し芸術家を招き入れた地域づくりも実現している。

成功の条件はリーダーにあり、率先垂範、時に使われ役に徹し忍耐力と我慢力が不可欠と話す。笑顔で快話、常に目配り、気配りしながら何事にも取り組み、ムードづくりが無から有への第一歩と語る。地域再生は優れたリーダーの存在を強く感じた。

「出来る事から始めよう」一つ一つ。素晴らしい成功例を体験した。今後の活動に活かしたい。



【「行政視察 うきは市」 竹内 勝利】

うきは市は、福岡県の南東部に位置し、協働のまちづくり基本条例や食と農と健康を結ぶ食育推進条例等を制定し、市民と行政の協働のまちづくりを進めている。

道の駅うきはを拠点としたヒト・モノ流動の活性化を進めており、国土交通省による全国35ヶ所の「重点」道の駅にも選定されている。うきは市の特産品を展示即売することにより、市の特産品の販路拡大と、うきはブランド品の開発化を目指している。農業、観光情報の受発信体制の確立により、グリーン・ツーリズム事業の推進と中山間地区の振興が促進され、農業体験等により、都市住民との交流が活発化されている。都市住民が必要とする商品の開発、消費者のニーズに応じた高収益型の農業経営の実践など、農業、商業の活性化や後継者育成にも力を入れている。高齢者、女性等の労力活用による、地域農業の活性化が図られ、生きがいにも貢献している。道の駅うきはは、副市長、企画財政課、うきはブランド推進課、農林振興課、生涯学習課、保健課、福祉事務所、住環境建設課が中心となり、地域の人達と行政がひとつになって、イベントや外国人を含む来訪者の呼び込みにも積極的に取り組んでいる。今回の行政視察では、行政と市民が一体になり、地域創りに取り組まなければならないと思った。



【文化遺産・地域再生についての行政視察 大久保 進】

初めに南九州市における武家屋敷庭園を訪れ、町全体が箱庭のような感じがして、すごく心和む造りであった。石垣を積むにもそれぞれ理由があり、感心させられることが多かったが、ただ蛾の大量発生があり問題化している。観光ガイドの説明もわかりやすかった。

続いて「知覧特攻平和会館」を訪れた、多くの高校生が語り部の説明を真剣に聞き入っていた。全体の語り部の説明が終わってからも、一部の生徒は個人的に語り部の方に質問をしていた。館内を一回りして当時の状況が手に取るように解る感じであり、二度と起こしてはいけない事を改めて感じた次第である。語り部の後継者の問題は切実な問題である。入館者は平成26年度、53万人強の方が来館している、また、修学旅行で訪れた学校は、高校148校、中学198校、小学233校であった。埼玉県は高、中で8校であった。特攻隊員は若い人で17歳であり、今の高校2年生の年齢であり、戦争については自分の感じ方で、戦争・平和・命・家族の絆等を考えてほしいと願うものである。

2日目は鹿屋市の「やねだん」の取り組みについて勉強させていただいた。「やねだん」の理念は、行政に頼らない、むらおこしを目指している。補助金漬け行政に頼りきりでは、集落も人も育たない、集落民一人ひとりがレギュラーであり補欠は存在しない。地域活動ではできる人たちだけでやっても長続きしないし感動もない。秩父より高齢化が進むこの集落での取り組みは非常に参考になる。「やねだん」では、住んでよかった、住みたいなど思える地域づくりを目指している。秩父市でも、実践できるものを模索していきたい。

【歴史と景観を活かしたまちづくり 松澤 一雄】

鹿児島県南九州市は、知覧地区の歴史と景観を活かしたまちづくりにより、観光振興を図っている。観光入込客数は、年間80万人から100万人を数えている。知覧地区の武家屋敷は、領主の御仮屋を中心として道路割をなし、防備を兼ねた城壘型の区画となっていて、屋敷の戸ごとに庭園を築き、通りに面した生垣との調和が取れた景観を造っている。(写真参照)

町並み保存への取組は、2箇所庭園が戦前、国の文化財に指定されていたが、戦後の文化財保護法で解除され、昭和45年以前は歴史的文化遺産の学術調査などで紹介されたものの行政・住民とも文化財としての認識は薄かった。しかし昭和50年頃から地区住民や行政が歴史と文化を活かした観光の町づくりに目を向け、議会においても伝統的建造物群保存地区保存条例を議決し、歴史と景観を活かした潤いのある街並みの保存整備を進めた。内容は、電柱、街路樹、路面整備等景観への工夫を凝らした。昭和56年改正後の文化財保護法により地区内の7つの庭園が国の名勝に、地区の18.6haが重要伝統的建造物群保存地区に選定され、国県の補助による伝建保存事業を開始し、多くの整備が進められ、歴史と景観を活かした町として観光入込客の増加が図られた。武家屋敷の今後の管理は、重文指定により国県からの補助を受け更なる整備が進むであろう。



【行政視察報告 荒船 功】

○鹿児島県南九州市「文化遺産を活用した観光振興」

武家屋敷庭園のある18.6haは、昭和56年「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、7つの庭園は国の「名勝」に指定されている。街並み整備事業を進めるなかで、昭和62年に知覧特攻平和会館が新築されて、より多くの資料展示や語り部の充実等により、平成2年以降入場者は100万人を突破していたが、ここ数年は80万人前後で推移している。

市には、宿泊施設が少なく、市内での滞在時間の確保が課題との説明があった。

○鹿児島県鹿屋市串良町「柳谷地区（やねだん）の地域再生」

柳谷地区は、人口約300人、高齢化率40%の中山間地域の集落（通称：やねだん）である。平成8年に高齢者の輪番制、名誉職だった自治公民館長に、高齢化が進行し、コミュニティ崩壊を危惧した地区の長老が、銀行員、うなぎ養殖等事業経営経験のある豊重哲郎氏に白羽の矢を立て就任を懇願した。

就任した豊重哲郎館長は、集落住民の全員参加を得るため、「説得するより納得、口で語るより汗で語り、目立たず黒子に徹する」を心掛け、住民総出のさつま芋栽培から焼酎の委託製造・販売、家畜の悪臭公害撲滅のための「土着菌」の開発・販売、空き家を改造して集落が迎える館「迎賓館」として7人のアーティストの受け入れ等を行った。また、平成19年には、地域リーダー養成のための「やねだん故郷創生塾」を開講する。講演において、館長は「宗教は語らない、命令はしない、選挙には関係しないが鉄則」と語っていた。